A Study of the Bergsonian Notion of <Sensibility> in his Early Years: Focusing on his Three Lectures on Psychology Given at the End of 19th Century

Ryu MURAKAMI

In another paper I already pointed out that Henri Bergson (1859-1941), a French philosopher, in his later years argues on <sensibility> from his particular point of view. In this paper I aim to examine his notion of <sensibility> in his early years, focusing on three lectures on Psychology given at the end of 19th century.

Except for *The Two Sources of Morality and Religion* (1932), Bergson scarcely refers to <sensibility> in the works published in his lifetime. And furthermore, based on Bergson's will, it has been forbidden for a long time to publish the reports of his lectures given at several lycées, École Normale Supérieure and Collège de France. Therefore, it has been extremely difficult to guess when, how and under what circumstances Bergson elaborates his own idea of <sensibility>.

Since the end of 20th century, however, the reports of Bergson's lectures are published one after another. These new documents will enable us to get over the difficulty mentioned above. This paper forms a part of such an investigation.

初期ベルクソン哲学における「感性」概念

―― 一九世紀末の「心理学講義」を中心に ――

村　上　　龍

序

本稿の目的は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）が、哲学的キャリアの初期において、「感性（sensibilité）」という能力についてどのように考えていたのかを、一九世紀末に行われたと推定される三つの講義の記録を主たる手がかりとして、解明することである。

別の機会に明らかにしたように[1]、ベルクソンは、哲学的キャリアの晩年に上梓された最後の主著『道徳と宗教の二源泉』（1932年）（以下、『二源泉』と略記）において、「感性」をめぐるきわめて興味ぶかい構想を、通りすがりに披歴している。だが、それ以前の彼の諸著作には、「感性」概念にふれる目ぼしい記述が見あたらない。そのうえ、リセや高等師範学校、コレージュ・ド・フランス等における講義の記録や、書簡などといった二次的資料も、ベルクソン自身の遺言にもとづいて、ながらく公開されなかった経緯がある。そのため、ベルクソンがいつ頃、どのような背景のもとで、いかなる経緯をへて、「感性」をめぐる上述の構想を育んだのかを推しはかることは、従来、資料のうえでの制約のゆえに、きわめて困難であった。

ところが、二〇世紀末以降、未刊の講義録や書簡などがつぎつぎと公開されるにいたった[2]。さきに述べた資料上の制約に起因する困難は、いまやこれらの新資料を活用することによって、のり越えられるであろう。本稿は、そのよう

---

[1] この点については、拙稿「「感性（sensibilité）」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯―― 一なるものと多なるものとの関係を軸に――」（『美学』、63巻１号（240号）、2012年、25-36頁）を参照されたい。

[2] ただし、ベルクソンがのこした遺言との兼ねあいもあり、これら新資料のありうべきとり扱いについては、研究者のあいだでもいまだに見解の一致がみられていない。この点をめぐるさまざまな立場については、本田裕志『ベルクソン哲学における空間・延長・物質』（晃洋書房、2009年、286-292頁）にくわしい。

なとり組みの一環をなすものである。

本稿における論述の手順は、以下のとおりである。さいしょに、第１節において、「感性」をめぐるベルクソンの構想の独自性を査定するべく、比較のための材料としてラランドの『哲学辞典』（1926年）をとりあげ、「感性」の項目を概観する。次いで、第２節では、『二源泉』から読みとれる「感性」の構想を、初期の講義から読みとれるそれとの比較に必要なかぎりで、いそぎ足にて確認する。つづく第３節から第５節では、年度を異にする同名の三つの講義の記録、すなわち、クレルモン＝フェランのリセ、ブレーズ・パスカル校で行われた「心理学講義」（1887-1888年）と、パリのリセ、アンリ四世校で行われた「心理学講義」（1892-1893年）ならびに「心理学講義」（1893-1894年）[3]を順次とりあげ、「感性」への論及がみられる箇所を検討する。そして、さいごの第６節において、上記三つの講義がどの程度、ベルクソン自身の思想を反映するものかを見定めるべく、初期の著作との照合を試みる。

一連の考察をへて明らかとなるのは、ベルクソンが、哲学的キャリアの初期においては、のちに一と多の対概念をつうじて示すことになる独自の着眼を欠いたまま、同時代の思想的環境にてらして特異に映るところのない議論を、大筋においては展開していることである。

第１節　ラランドの『哲学辞典』における「感性」概念の規定

本節では、ラランドの『哲学辞典』をとりあげ、ベルクソンが活躍した一九世紀末から二〇世紀前半にかけてのフランスにおいて標準的であったとみられる、「感性」概念の規定を確認する。この用語辞典は、ベルクソンをも含めたフランス哲学会の会員たちが1902年から1923年までに重ねた討議をもとに、アンドレ・ラランド（André Lalande, 1867-1963年）を編者として、1926年に刊行された。したがって、哲学上の術語にかんする、ベルクソンと同時代を生きた哲学者たちの総意が、ここには反映されていると考えられる。

---

[3]『ベルクソン講義録Ⅱ』（1992年）に収録された「心理学講義」（1893-1894年）は、当初、編者アンリ・ユードによって、1892-1893年度に行われたものと推定されていた。しかしながら、2008年にあらたに公刊された「心理学講義」（1892-1893年）の編者シルヴァン・マットンによれば、ユードの推定は一年度分だけ誤差をはらんでいたようである。Cf. C.P. 39-53.

1．「感性」概念の外延としての「感覚」と「感情」

『哲学辞典』の「感性」の項目には、以下のような記述がみとめられる。

> 情緒的な（affectifs）現象の総体。情緒的な性格を有する状態を経験し、そうした性格を有する反応を産みだす能力。「１　感性（Sensibilité）とは、我々の内にある、あらゆる種類の感情（sentiments）と感覚（sensations）を経験する能力である[4]［。」］

ここでは、一九世紀中頃に刊行された哲学便覧[5]も参照しつつ、「感性」を「情緒性（affectivité）」[6]にあずかる能力として規定したうえで、その下位区分として「感情」と「感覚」を列挙している。なるほど、この項目では、「感性」という用語を「もうすこし広い意味」で捉えた場合には、「傾動（inclinations）」、「情念（passions）」、「快（plaisirs）」、「不愉快（désagrément douleur）」、「情動（émotions）」までもが包摂されると述べられているから[7]、「感覚」ならびに「感情」が排他的に「感性」概念の外延をなすと考えられているわけでは、かならずしもないようである。しかしながら、主たる情緒的な心的状態として、これら二者が念頭に置かれていることはまちがいない。

2．「感覚」ならびに「感情」の概念規定

それでは、「感覚」および「感情」は、それぞれどのように規定されるのか。以下、「感覚」、「感情」の順に該当箇所を引用する。

---

[4] André Lalande（éd.）, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, P.U.F., 2002（1926[1re]）, p. 981.

[5] Amédée Jacques, Jules Simon, Émile Saisset, *Manuel de philosophie à l'usage des collèges,* Joubert, 1847.

[6] なお、『哲学辞典』においては、「情緒をあたえる（affecter）」という用語が、「感性に作用をおよぼすこと」として規定されている（Lalande, *op.cit*., p. 28）。また、「情緒（affection）」の項目には、「外的な原因によってひき起こされた状態の変化に存する」「感性のあらゆる運動のこと」との記載がある（Lalande, *op.cit*., p. 29.）。以上を総括するならば、ここでは、「情緒」が受動性によって規定されているものとみられる。

[7] Lalande, *op.cit*., p. 981.

その純粋性において捉えることがほとんど不可能であるような心理的所与であるが、いわば極限に向かうようにしてこれに近づくことはできる。それは、意識のうえでの変容を産みだすことのできる生理的な刺激によって条件づけられた、生の、直接の状態であろう[8]［。］

より専門的には、直接の有機体的原因（causes organiques）ではなく［…］精神的な原因（causes morales）を有する、快や苦痛、情動[9]。

ここでは、一方の「感覚」が、「意識のうえでの変容を産みだすことのできる生理的な刺激によって条件づけられた」「心理的所与」として、他方の「感情」が、「精神的な原因」に由来する情緒的状態として、それぞれ規定されている。なお、「感情」の規定について付言すれば、「精神的な（morale）」という用語の使用にさいしては、「物体やその他の物質的対象ではなく、精神（l'esprit）に関連する[10]」という語義が念頭に置かれているから[11]、「感覚」と「感情」とが、それぞれの原因におうじ対比的に規定されていることは明らかである[12]。

以上のように、ラランドの『哲学辞典』は、「感性」を情緒性にあずかる能力として規定したうえで、生理的な刺激に由来する「感覚」、ならびに、精神的な原因に由来する「感情」を、そのもとに包摂している。

第２節　『道徳と宗教の二源泉』にみられる「感性」の構想

『二源泉』にみられる「感性」の構想については、すでに別の機会に論じて

---

[8] Lalande, *op.cit*., p. 976.

[9] Lalande, *op.cit*., p. 985.

[10] Lalande, *op.cit*., pp. 653-654.

[11] したがってまた、「精神的な原因」と対をなす「直接の有機体的原因」が、身体にたいする物理的な刺激を意味することは言うまでもない。

[12] なお、ここでは、「感情」の下位概念の一つとして、「情動」が挙げられている。ところで、「情動」それ自体はといえば、この用語辞典のなかでは、「突然の、しばしば激しく、強く、運動の増加もしくは停止を伴う、そうした衝撃」として規定されている（Lalande, *op.cit*., pp. 278-279）。以上を総合すると、ラランドの『哲学辞典』において、「情動」という用語を用いるさいに念頭に置かれているのは、精神的な原因に由来する情緒的状態である「感情」のうち、とくに激しく強いものであると思われる。

ある[13]。本節では、とりいそぎその要点を示すにとどめる。

第一に、『二源泉』において「感性」とは、「感情」や「情動」を主たる外延とする概念であるが、ただし、ここには「感覚」は包摂されない。というのも、「感覚」が物理的な刺激に由来する情緒的状態であるのにたいし、おなじく情緒性によって規定される「感情」や「情動」については、事情がまったく異なるからである[14]。

第二に、『二源泉』において「感性」とは、いうなれば高次の成分と低次のそれとを併せもつ概念である[15]。

第三に、『二源泉』において「感性」とは、その低次の成分にかんしては、一定の表象から付随的に情緒上の効果を被る、そのかぎりで受動的な能力である[16]。

第四に、『二源泉』において「感性」とは、その高次の成分にかんしては、いまだかつて実現されることのなかった二つとない（unique）可能性を「情動」として受容する、そのかぎりで受動的な能力であると同時に、受けとられた可能性の実現にむけて知性ならびに意志に働きかける、そのかぎりで能動的な能力でもある。ここで言う未展開の可能性とは、未形成であるがゆえに、生命体にも比せられよう仕方で渾然と浸透しあう、諸々の潜在的な表象もしくは行為である。したがって、「感性」からの働きかけをうけた知性ならびに意志は、ピラミッドの頂点から底面へ降るかのごとくに、渾然たる一性から判明なる多性への移行によって、あるいは、単純にして不可分な統一からの分散によって、事をはこぶ。このように、『二源泉』のベルクソンは「感性」を、とくにその高次の成分にかんして、しばしば「情動」という用語を用いつつ、やがて判明な多性へと展開されるであろう、そのような一性の受容によって規定し、知情

---

[13] 註１に前掲の拙稿がこれにあたる。

[14] Cf. D.S. 40 : 1011.

[15]「感性」の高次ならびに低次の成分という用語を、ベルクソン自身は用いてない。本稿でとくに「感性」の高次の成分と呼ぶのは、ベルクソンが「知性 - 以上の（supra-intellectuelle）」（D.S. 41 : 1012）と形容する情緒的状態と、これとの並行性から「意志 - 以上の」とも形容されよう情緒的状態との双方にかかわる、「感性」の側面である。他方、低次の成分のほうは、ベルクソンが「知性 - 以下の（infra-intellectuelle）」（*ibid.*）と形容する情緒的状態にかかわる、「感性」の側面である。「知性 - 以上の」、「意志 - 以上の」、「知性 - 以下の」という三つの形容詞の内実については、以下で論及する。

[16] Cf. D.S. 40-41 : 1011-1012.このように、先んじて存する表象（「知性的状態」）の結果として生じる情緒的状態のことを、ベルクソンは「知性 - 以下の」と形容するのである。

意のトリアーデのうちで「感性」を最上位に位置づけるのである[17]。

ラランドの『哲学辞典』と比較するならば、「感性」をめぐる以上の構想は、「感性」概念の外延を論ずるにさいしての「感覚」の除外と「情動」という用語の重用、および、とくに「情動」という用語を多用しつつ、一と多の対概念をつうじて語られる、「感性」の高次の成分への着眼という二点において、独自性を有すると言える。

第３節　1887-1888年度の「心理学講義」における「感性」

本節以下では、三つの講義の記録を年代順にとりあげ、『二源泉』との比較検討に付す。ここでは、処女作『意識に直接与えられたものについての試論』（1889年）（以下、『試論』と略記）の刊行の１年前に行われた、1887-1888年度の「心理学講義」を検討の俎上にあげる。

１．「感性」概念の外延としての「感覚」と「感情」

まずは、第９講「心的事象の分類」にみられる、「感性」概念の端的な規定をみよう。

> これらの現象、すなわち、一方で魂のうちにおのずと、我々の意志とは無関係に生じ、他方で表象を含まないという点で共通する、つまりは純粋に情緒的な諸々の現象は、感情、感覚、傾動、情念などの、感性の現象と呼ばれる（C. I 48）［。］

「感性の現象」とは、「情緒的」であることによって特徴づけられる、換言すれば、「意志とは無関係に」「おのずと」「生じ」る、「表象[18]を含まない」心的事象である。

---

[17] Cf. D.S. 30-44 : 1003-1014, 267-270 : 1189-1191. このように、やがて生じる知性的状態にたいし、結果ではなく原因となるような情緒的状態のことを、ベルクソンは「知性 - 以上の」と形容するのである。また、これとの並行性から「意志 - 以上の」とも形容されよう情緒的状態、すなわち、一定の道徳的行為を生じさせる情緒的状態をも、ベルクソンは併せて想定している。

[18] ここでは、「表象」という用語が、外界についての情報という含意で用いられている。

そして、それは「感情」、「感覚」、「傾動」、「情念」に下位区分される。ベルクソンはそのように言うのである。

以上の概念規定は、「感性」に属する事象を情緒的と形容する点において[19]、『二源泉』におけるそれと共通している。さらに言えば、「情緒」概念についても併せて明確な定義が施されている点で、ここでの論述は、『二源泉』におけるそれよりも、いっそう目くばりがゆき届いているだろう。

しかしながら、「感性」概念の外延にかんしては、この講義はベルクソン最後の主著と観点を異にする。

とはいえ、上の引用文中で、「傾動」や「情念」までもが併せて挙げられている点を、我々は問題としたいのではない。第１２講「傾動」をみると、この用語は、「感覚」や「感情」などといった「魂の状態」の前提となる、「満足をもとめる自然な欲求、欲望」として規定されており（C. I 67）、また、第１４講「情念」では、当該の用語が、「堕落し、退廃した傾動」（C.I 79）として語られている。してみると、ベルクソンの考えでは、これら二者は、情緒的状態それ自体というよりはむしろ、そうした魂の状態の前提をなす傾向にすぎないのである。

そうだとすれば、ベルクソンはここで、「感覚」ならびに「感情」を、「感性」に属する主たる情緒的状態として想定し[20]、しかもそのさい、「情動」を併せて挙げていないのであって、我々が注目すべきはこの点である。

２．「感覚」ならびに「感情」の概念規定

「感性」概念の外延にかんする、『二源泉』との見解の相違は、これだけにとどまらない。その点を明らかにするべく、ひとしく「感性」のもとに包摂される「感覚」と「感情」を、ベルクソンがどのように定義するのかをみることに

したがって、晩年のベルクソンが「感性」の高次の成分にかかわるかぎりで論じるような、潜在的な表象の含有が、ここで念頭に置かれているわけではない。

[19] ただし、その一方でベルクソンは、「感覚」については、これを端的に情緒的な状態とはみなしていない。彼は折にふれて、外界についての情報を含む、そのかぎりで「表象的な」と形容されよう「感覚」にも、あるいは、「感覚」のうちのそうした成分にも、論及している（C.I 117）。同様のことは、本稿で併せてとりあげる、のこり二つの講義録、ならびに、初期の二冊の著作にかんしても指摘できる。Cf. C.P. 79-80, C. II 221, D.I. 29-32 : 29-31.

[20] じっさい、次節でみるように、ベルクソンは1892-1893年度の「心理学講義」にさいしては、類概念としての「感性」のもとに、「感覚」および「感情」のみを包摂している。

しよう。

ベルクソンは第１１講「感覚と感情」で、「感覚」や「感情」の「大部分は快もしくは苦痛（douleurs）である」ことを述べたうえで（C.I 58）、両者についてそれぞれ以下のように語る。

> その直接的な原因が物理的な印象である、より正確に言うならば、神経系の状態に発生した変化である、そのような魂の状態は、およそ感覚と呼ばれる（C. I 59）［。］

> 感情は、感覚と同様に、魂の純粋に情緒的な状態である。――それは次の点において感覚と異なる。すなわち、感覚が物理的な刺激を直接の原因とするのにたいし、感情は大なり小なりつねに観念、知性的な事象、表象に由来する（C. I 64）。

ここでは、それぞれの原因におうじて、「感覚」と「感情」が対比的に概念規定されている。ベルクソンの考えでは、一方の「感覚」は、神経系にもたらされた「物理的な刺激」に由来する、快い、もしくは、つらい情緒的状態であり、他方の「感情」は、観念などに由来する、快い、もしくは、つらい情緒的状態なのである[21]。

「感覚」や「感情」を、快い、ないし、つらいと形容する点については、『二源泉』の議論との接点をにわかには見いだしがたいため、ひとまず措こう[22]。そのうえで、以上のことをふまえるとき、「感性」概念の外延をめぐる、目下検討中の講義とベルクソン最後の主著とのあいだの異同について、我々は以下の諸点を指摘することができる。第一に、ここでは、ベルクソンは、のちの『二源泉』におけるのと同様の仕方で規定された「感覚」を、ただし、晩年とは異なり、「感性」のもとに包摂している。第二に、ここでは、ベルクソンは、『二源泉』にそくして低次のと形容されよう「感情」を「感性」のもとに包摂する一方で、この最後の主著にそくして高次のと形容されるべき「感情」については、考慮にいれていない。そして第三に、晩年のベルクソンならば、「感情」と併せて「感性」のもとに包摂し、しかも、とりわけ「感性」の高次の成分に論及

[21] ここで言う「感情」にかんして、ベルクソンはたとえば、「祖国の偉大さと栄光についていだく観念」に起因する「よろこび」などを挙げている（C. I 64）。

[22] この点については、次節以降であらためて論じる。

するさいに多用することになろう、「情動」にいたっては、ここではいっさい考慮のそとにある。

3.「感性」の知性および意志との関係

「感性」概念の外延を上述のごとくに考えるとき、「感性」の高次のと形容されるべき成分は、いっさいの考慮のそとに置かれることになる。だとすれば、「感性」から知性への働きかけ、ならびに、「感性」から意志への働きかけが、ここでとくに論じられることもなかろう。

じっさい、ふたたび第9講「心的事象の分類」にたち返るならば、知情意の三項のあいだの関係については、以下のような記述しか見あたらない。

> それゆえ、可能な事例は全部で三つしかないわけである。――ある場合には、魂は能動的である――あるいは、魂は受動的で、外的な対象の表象を伴わない――もしくは、魂はやはり受動的であるが、こうした表象を伴う。――これは結局のところ、次のことを意味するだろう、ようするに、心理的事象については三つのカテゴリーを区別することができるのみである。すなわち、本能や意志、習慣といった能動的な事象――感性的な事象、知性的な事象（C. I 52）。

このように、ベルクソンは1887-1888年度の「心理学講義」においては、意志にかかわる事象を能動性によって[23]、知性的な事象を「外的な対象の表象を」「伴う」受動性によって、そして、「感性的な事象」を「外的な表象を伴わない」受動性によって、それぞれ規定しつつ、三者を相互に弁別するばかりである。なるほど、ここでもたしかに、「感性的でしかない心的事象」や「知性的でしかない現象」を見いだすのがじっさいには困難であり、弁別されるべき三つの事象が事実上は混じりあうものであることを、ベルクソンは付言している（C. I 52-53）。だが、それら三者のあいだの連携については、いっさい論及することがないのである。

[23] 本稿では、「習慣」ならびに「本能」の問題にはたちいらない。

第４節　1892-1893年度の「心理学講義」における「感性」

つづいて、時計の針を５年ほど進めよう。

１．「感性」概念の外延としての「感覚」と「感情」

ベルクソンは、1892-1893年度の「心理学講義」においても、「感性」概念の外延にかんしては、５年前の講義にさしいて採られた方針を維持している。この点については、第３講「感性　快ならびに苦痛」の冒頭をかざる、以下の記述をみれば明らかである。

> 感性の理論は、感覚と感情の研究を同時に含む。あとでみるように、感覚は、外的な刺激によって決定された身体の状態を原因とする。これとは対照的に、感情は精神的な原因に、すなわち、表象的な観念に起因する。しかしながら、感覚と感情には共通する点もある。というのも、それらはともに、心地よい、もしくは、不愉快な情緒的状態であり、快ないし苦痛であるからだ（C.P. 68）。

ベルクソンはここで、「感性」について講じるうえでのプログラムを提示するなかで、関連する諸概念を簡潔に整理している。「外的な刺激」に起因する「感覚」と「表象的な観念」に由来する「感情」との共通性を、「心地よい、もしくは、不愉快な情緒的状態」である点にもとめつつ、両者をひとしく「感性」のもとに包摂する視点は、さきに検討した1887-1888年度の「心理学講義」においても確認できた。

しかしながら、その一方で、目下検討中の講義については、５年前とは異なり、『二源泉』にそくして「感性」の高次のと形容されるべき成分に一脈通じる着想を、二点ほど指摘できる。

２．「感性」と意志の関係

第一に、1892-1893年度の「心理学講義」においてベルクソンは、「感性」と意志との関係に一定の仕方で考察をくわえている。

２－１．快い情緒的状態の場合

第３講「感性　快ならびに苦痛」をひきつづき読みすすめるならば、快い情緒的状態について述べた、以下のような記述がみとめられる。

> 心地よい対象のもっとも際だった特徴とは、追いもとめられること、我々を引きつけることである。[…] それゆえ、およそ快のうちには、あるものへの運動が内包されている［。…］快、そしてまた、よろこびは、そうじて刺激をもたらす。すなわち、いかなるよろこび、いかなる快も、我々を行動へといざない、我々の行動力を高める。あらゆる心地よい状態が、自由にあずかるのである（C.P. 69）［。］

ここでは、行動にたいする快の影響が論じられている。「心地よい状態」にあるとき、我々はこれに「刺激」され、さらなる快を「追いもとめ」て、おのずと行動を実行にうつす。そのようにしていわば「運動」を「内包」した快を、ベルクソンは「自由にあずかる」情緒的状態とみなすのである。

このようにベルクソンは、すくなくとも快い情緒的状態に関連するかぎりで、潜在的な行動の内包に論及し、「感性」に属する心的事象が行動へと、それも、自由なとさえ形容されようそれへと、おのずから展開されゆくことを主張する。とはいえ、そのさいに彼の念頭にあるのはあくまで、さらなる快をめざす行動でしかない。『二源泉』にそくして高次のと形容されるべき成分について指摘できるような、未展開の可能性の実現などといったことが、ここで問われているわけではないのである。

２－２．つらい情緒的状態の場合

なお、第３講「感性　快ならびに苦痛」では、行動にたいする苦痛の影響についても、併せて以下のように述べられている。

> 反対に、およそ苦痛は意気消沈させる効果を発揮する。それは我々を弱らせ、ある意味では行動への適性を奪う。なるほど、それは多くの場合、ためになる効果を発揮して、我々のがわの努力を喚起することがあろう。[…] だが、この苦痛の効果は、じつは間接的なものである。というのも、我々

がそのさいに遂行する努力は、苦痛から逃れること以外の目的を有していないからである。その真の原因はけっきょくのところ、よろこびへの希望や期待に他ならない（C.P. 69）。

快が我々を行動へいざなうのとは対照的に、苦痛は我々を行動から遠ざける。なるほど、苦痛が行動を誘発するかにみえる場合もあろう。だが、そのような行動もじつのところは、快への「希望や期待」を原動力とするであり、苦痛それ自体によって誘発されたのではない。ベルクソンはそう言うのである。

このようにベルクソンは、快い情緒的状態について論じる場合とは異なり、つらい情緒的状態に関連するかぎりでは、「感性」を意志と連携させることがない。

３．「感情」における諸要素の結合

目下検討中の講義にかんしては、『二源泉』にそくして高次のと形容されるべき「感性」の成分に一脈通じる着想が、もう一点みとめられる。

この点については、第５講「感情」にみられる以下の記述を参照したい。

換言すれば、いかなる感情についても、抽象によって三つの部分、三つの契機を区別することができ、その詳細は以下のとおりである。

１　共感もしくは反感をよび起こす観念の形成。

２　この観念が、有機体、身体のうちにもたらす反響、あるいは、それが記憶のなかの、身体によって遂行された行為と関連する部分にもたらす反響。

３　諸々の有機体的感覚の知覚、ないしは、空間のなかでの行動と関連する諸々のイメージの知覚。

この三つの要素の緊密な結合こそが、感情と呼ばれるものなのである（C.P. 93-94）。

ここでは、「感情」が複数の構成要素に分析されている。ベルクソンによれば、「共感もしくは反感をよび起こす観念」、および、この観念によってひき起こされる「諸々の有機体的感覚[24]」や「諸々のイメージ」、これらの「緊密な結合」こ

[24] ベルクソンは、第４講「感覚」において、「有機体的感覚」の例として、「空腹感」、

そが、じつは「感情」の正体なのである[25]。そして、ベルクソンはこの結合体を、「魂」としての「さいしょの観念」と、「身体」としての「諸々の感覚ないしイメージの総体」とを併せもつ、「真の生きもの」と呼ぶ（C.P. 98）。

このようにベルクソンは、「感情」を複数の成素に分解したうえで、これら諸要素の結合のありかたを、生命体のそれになぞらえている。先述のとおり、ベルクソン晩年の主著によれば、「感性」は、その高次の成分にかんするかぎり、渾然たる一性、諸要素の相互浸透からなる統一にあずかる能力として位置づけられるのであったが、そのさいにも、ベルクソンはやはり生命体の比喩に訴えていた。ただし、目下検討中の講義で問題となる統一はあくまで、それ自体で出来あがっている観念と、この観念から結果する諸々の「感覚」ないしイメージとによって、織りなされるものでしかない。その意味では、この「感情」はむしろ、『二源泉』にそくして低次の、もしくは、「知性 - 以下の」と形容されるべきであろう。じっさい、ここでは、諸要素の結合体としての「感情」をめぐって、一性から多性への移行ないし分散が語られることもない。

以上のように、1892-1893年度の「心理学講義」においてベルクソンは、「感性」、ならびに、これと関連する諸概念の規定を、５年前の講義からおおむねひき継ぎながら、その一方で、「感性」と意志との連携や、渾然たる統一などの論点にかんして、晩年の思想にも通じる着想をかいま見せている。しかしながら、おそらくは５年前の方針をおおむね踏襲するがゆえに、そうした着想も、高次のと形容されるべき成分をも視野におさめた「感性」の構想へと結実することがない。

第５節　1893-1894年度の「心理学講義」における「感性」

1893-1894年度の「心理学講義」にさいしては、ベルクソンは大筋におい

「のどの渇き」、「消化器、呼吸器、循環器より発する諸感覚」を挙げている（C.P. 79）。1887-1888年度の「心理学講義」では、この概念は、第１１講「感覚」のなかで、「我々の有機体の全般的な状態について教えてくれる」「一群の感覚」として、明快に規定されている（C. I 60）。なお、ベルクソンの著作のなかには、この概念は登場しない。

[25] ベルクソンはここで、感情を三つの成素に分解しているが、前後の文脈をふまえるかぎり、２と３とを相互に区分する必要はないように思われる。じっさい、のちにみるように、次年度の「心理学講義」ならびに『試論』においては、ベルクソンはこの点にかんして、我々の推察を裏づける観点にたっている。

て、１年前とおなじ内容を講じている。第一に、「感性」に属する心的事象はここでも、一方で「被られるものであり」、他方で「いかなる表象も含まない」という、「二重の特徴」をそなえた「情緒的状態」として定義される（C. II 237）。第二に、ベルクソンはここでもやはり、「感覚神経への刺激から直接的に結果する心理的状態」としての「感覚」と（C. II 220）、「先行する心理的状態」、わけても「観念」によって「ひき起こされる情緒的状態」としての「感情」とを（C. II 227）、ひとしく「感性」のもとに包摂する。第三に、「感情」については、「中心をなす観念」と、「この観念の実現をめざして身体のえがく諸々の運動によってひき起こされる、多数の感覚」との結合体として、もしくは、「中心をなす観念」と、この「観念の指導のもとで同時に表象される諸々の可能な行動の体系」との結合体として、ベルクソンはこれを論じている（C. II 227-228）。そして第四に、彼は前年度にひきつづき、「感性」を意志と連携させる。

ただし、さいごに挙げた四点目を論じるうえでは、ベルクソンは、１年前とはいささか異なる観点にたっているようにみえる。

１．「感性」と意志の関係――快い情緒的状態の場合――

ベルクソンは、第２講「情緒的現象　快ならびに苦痛」のなかで、「感覚や感情は、心地よいか、もしくは、つらいものである」（C. II 210）ことを述べたうえで、前年度と同様に、快および苦痛と行動との連関について論じている。

さいしょに、快にかんする記述をみよう。

> それゆえ、このように言うことができるかもしれない、すなわち、快とはあるときには、有機体を正常な均衡状態に置きなおしたことについての我々の意識であり、またあるときには、この均衡を保持し、時間と空間のなかで自らを自由に展開することについての意識であると。したがって、快とはまずもって活動であり、自由なのだ（C. II 216）。

ここでは、活動の可能性とのかかわりにてらして、快い情緒的状態が論じられている。身体を「正常な均衡状態に置きなおした」とき、もしくは、「この均衡を保持し」つづけるとき、我々は自らが「自由に」「活動」できることを自覚するだろう。「快」とは、そのことに伴うよろこびに他ならないとベルクソンは言うのである。

さきにみたように、我々を刺激し自由な行動にいざなうものとして快を論じる、前年度の講義においては、のちの『二源泉』を予感させるかのように、快は、行動にたいする原因として位置づけられた。これにたいし、行動の可能性の自覚に由来するものとして快を論じる、目下検討中の講義においては、快はむしろ、現実的ないし可能的な行動の結果として位置づけられることになる。してみると、快い情緒的状態を論じる文脈で潜在的な行動の内包に論及する１年前の講義については、たしかに指摘できた観点が、ここでは欠落しているのである。

２．「感性」と意志の関係――つらい情緒的状態の場合――

苦痛にかんする記述に目を転じるならば、1893-1894年度の「心理学講義」のうちに、やはり１年前の講義とは異なる観点を、ただし、上の快の場合とは対照的な仕方で、読みとることができる。

ベルクソンは、おなじく第２講「情緒的現象　快ならびに苦痛」のなかで、つらい「感覚」について以下のように述べる。

> これは、苦痛がなにより、我々の意志にたいする呼びかけ（appel）であり、こう言ってよければ、我々の自由にたいする呼びかけでさえあるということ以外の何を意味しようか。選択することのできない存在は、情緒的な感覚を経験することがないだろう。［…］感じることのできる特権的な存在とは、複数の可能な態度や手続きのうちから選択する余地を、自然よりあたえられたようにみえる、そのような存在のことである。そうした存在にとっては、情緒的な感覚、とりわけ苦痛の感覚が必要である。なぜならば、この感覚には、所与の状況下で実行することがいっそう有益である諸々の運動への指示や、その準備のようなものが、含まれているからである（C. II 215）。

ここでは、行動にたいする苦痛の影響が論じられている。ベルクソンによれば、苦痛のうちには、「所与の状況下で実行することがいっそう有益である諸々の運動への指示」が「含まれて」いるため、我々はこれをうけて、「複数の可能な態度や手続きのうちから」、その指示された「運動」を、自らの「意志」によっておのずと「選択する」ことになる。そして、ベルクソンは、このようにして我々

を一定の行動へいざなう側面に着目して、さまざまな情緒的状態のなかでもとくに苦痛こそが、「我々の意志」、「我々の自由」にたいして「呼びかける[26]」ものだと言う。

ベルクソンはこのように、前年度の講義におけるのとは反対に、むしろつらい情緒的状態に関連するかぎりで、積極的に「感性」を意志と連携させる。ただし、そのさいにベルクソンの拠ってたつ観点、すなわち、ある種の情緒的状態を、「外的な世界と、これにたいして我々が実行せねばならない行動とのあいだの仲介者」(C. II 221) とみなす観点は、じつのところ、1年前に快い情緒的状態を論じるうえで、彼が採用した観点そのものである。

したがって、ここでもまた、「感性」と意志との連携にかんして、ベルクソン最後の主著とも相通じる着想が、かいま見られるわけである。しかしながら、やはり前年度の講義の場合と同様に、ここで問われているのは、「感性」の高次の成分について指摘できるような、実現されるべき可能性の展開などといった事柄ではない。

第六節　初期の著作との照合

我々はここまで、一九世紀末に行われたと推定される三つの講義の記録を検討してきた。しかしながら、リセにおける講義というその性格上、ベルクソン自身の思想の端的な表明としてこれを受けとることには、疑義を呈するむきもあろう。ことによったら、ベルクソンは教壇のうえでは、自らに特有の概念装置や問題構成からはなれて、あえてごく標準的な、いわゆる教科書的な内容を、もっぱら講じていたのかもしれない。

こうした疑念に対処するべく、本節では、おなじく一九世紀末に刊行されたベルクソンの著作を参照することにより、上で検討に付した講義録がどの程度、ベルクソン自身の思想を反映するものかを査定したい。

1.『意識に直接与えられたものについての試論』

まずは、1889年に刊行された処女作『試論』をみよう。この著作の第一章

[26] なお、のちの『二源泉』において、ベルクソンは、範例的な存在が摸倣者をして、おのずとある種の意志決定へと傾かせる場面に論及するさいに、「感性」をつうじた意志への「呼びかけ」を語る。Cf. D.S. 30 : 1003.

でベルクソンは、さまざまな「感覚」、「感情」、「情動」をとりあげつつ、心的事象の「強度」（D.I. 2 : 6）について論じている。

1－1．「感情」と「情動」における諸要素の結合

いわゆる「感情」や「情動」の強度とは、「根本的な状態のただなかにみとめられる、心的事象の多性の大小」（D.I. 54 : 50）の問題だとベルクソンは言う。そうだとすれば、およそ「感情」や「情動」なるものは[27]、複数の成素からなる結合体だということになろう。

じっさいベルクソンは、「激しい情動」、および、「情動的な状態が激しさを失って深さを増す」ことで生まれる「深い感情」について（D.I. 23 : 24）、たとえば次のように述べる。

> 我々は、これらの運動［叫び声をあげる運動や、隠れたり逃げたりするための運動、さらには、動悸や痙攣］が恐怖そのものの一部をなしていると主張する。これらの運動のおかげで、恐怖は一個の情動たり得るのである［。…］これらを完全に削除してしまえば、恐怖の観念、すなわち、避けなければならない危険についてのまったく知性的な表象が［…］恐怖にとって代わることになろう。［…］すこしずつ、情動的な状態が激しさを失って深さを増すにつれて、末梢感覚は内的な諸要素に場所を譲るようになるだろう。そうなると、もはや外的な運動ではなく、観念や記憶、諸々の意識的状態の全般こそが、一定の仕方で方向づけられることになる（D.I. 22-23 : 23-24）。

ここでは、一方で、恐怖のように激しい「情動」が、ある観念と、これによって誘発される「末梢感覚」ないし身体の「運動」とに分析され、他方で、深い「感情」が、おなじくある観念と、これによって「一定の仕方で方向づけられる」、観念や記憶などの「内的な諸要素」とに分析されている。このように、『試論』において、「感情」ならびに「情動」が一定の観念に由来するものと考えるべ

---

[27] 激しさを示す心的事象をとくに「情動」と呼び、深さをそなえた心的事象をとくに「感情」と呼ぶ傾向が、『試論』の第一章をつうじてみとめられる。この点では、『試論』は、ラランドの『哲学辞典』と用語法を共有していると言ってよいだろう（本稿註12を参照されたい）。

ルクソンは、この両者を、当の観念をも含めた、複数の構成的な要素からなる結合体とみなすのである。

１－２．「自由の始まり」としての「感覚」

いわゆる「感覚」の強度を、「結果における一定の質を、原因の大きさによって評価すること」（D.I. 54 : 50）として説明するベルクソンにとって、「感覚」とは、「有機体の振動の意識面への表現」を意味する（D.I. 24 : 24）。ただし、「感覚」の原因をそのように有機体の振動にもとめるさいに、ベルクソンは、「有機体の内で生じたばかりのことや、現に生じていること」のみならず、「そこにおいて生まれようとしていること、生じる傾向にあること」までをも念頭に置いている（D.I. 25 : 25）。

したがって、彼は「感覚」について、次のように述べることになる。

> 後者［自由な運動］が前者［自動的な運動］と異なるのは、とりわけ、それが我々にたいして、きっかけとなる外的な作用とひきつづく意志的な反作用とのあいだに、情緒的な感覚の介在を示す点にある。［…］快や苦痛がいくらかの特権者［特権的な生物］において生じるのは、おそらく、反応が自動的に生じてしまうことにたいする抵抗を、自らに許すためである。ようするに、感覚には存在理由がないか、それとも、感覚とは自由の始まりであるかのいずれかである（D.I. 25 : 25-26）。

ここでは、快い、もしくは、つらい「感覚」が、自由意志にもとづく活動の可能性とむすびつけて論じられている。快や苦痛を伴う「感覚」が経験されるのは、「外的な作用」にたいして、我々が「自動的」ならぬ「意志的な反作用」を返す場合である。このことから、ベルクソンは、「情緒的な感覚」が意志的な活動を準備するものと考え、これを「自由の始まり」と呼ぶ。このように、ベルクソンは処女作において、「感覚」の原因を身体上の振動にもとめたうえで、「感覚」の内なる行動の潜在に論及するのである。

２．「感性」と意志の関係――『物質と記憶』――

次いで、ベルクソンの第二主著『物質と記憶』（1896年）をとりあげる。『物

質と記憶』は、身体を、「受けとられた運動とおくり返される運動との通路、私に働きかける事物と私が働きかける事物とのあいだの連結符、ようするに、感覚 - 運動的現象の座」(M.M. 169 : 292-293) として位置づける観点から、いわゆる心身問題にきりこむ著作であるが、この観点は、我々が講義録を検討するなかで出会った、快や苦痛にかんする議論を下地としている。

そのことは、たとえば、著作の冒頭にみられる以下の記述を参照すれば明らかである。

> これらの情緒が生じる状況を検討すれば気づくことだが、それはつねに、私が外から受けとる振動と、私が実行しようとする運動とのあいだに介在するのであって、諸々の情緒はあたかも、最終的な歩みにたいしてそれほど決定的でない影響をおよぼすべく、役割づけられているかのようである。[…] それぞれの情緒は各々の仕方で、行動へのさそいかけを、待つことや、場合によっては何もしないことをも同時に許しつつ、含んでいるようにみえる。[…] 私の確信したところでは、有機的世界のそこかしこで、これと同様の感性の出現が目撃されるのは、まさにつぎのような瞬間、すなわち、自然が生きものに、空間のなかを動きまわる能力を授けたあと、種にたいしては、脅威をおよぼす危険の全般を感覚によって告げしらせ、その危険から逃れるために採るべき予防策については個体にゆだねる、その瞬間においてのことである (M.M. 11-12 : 169-170)。

ベルクソンはここで、およそ情緒なるものが、「行動へのさそいかけ」を内に含んでおり、我々の行動にたいして「それほど決定的でない影響をおよぼす」ものとしたうえで、情緒のそのような側面を論じるさいに、とくに「感性」という用語を選んでいる。なお、この文章にひきつづく箇所では、「情緒的状態」が「感情もしくは感覚」(M.M. 12 : 170) と換言されているから、ベルクソンがここで「情緒」と言うときに、「感覚」と「感情」を念頭に置いていることは明らかである。してみると、ベルクソンは『物質と記憶』において、情緒性によって規定された「感性」のもとに「感覚」ならびに「感情」を包摂しつつ、「感性」を意志と連携させているのである。

以上のように、ベルクソンは初期の著作において、「感性」を「情緒性」によって規定し、かつまた、その「感性」のもとに、物理的な原因に由来する「感

覚」、ならびに、観念に由来する「感情」を包摂する。さらには、一方で、「感情」を複数の成素に分析し、他方で、「感覚」や「感情」の内なる行動の潜在にも論及している。ようするに、彼の初期の著作は、「感性」の構想にかんして、同時期に行われた三つの講義の記録と観点を共有しているのである。そうだとすれば、ベルクソンはリセの教壇で、自らの思想を多分にふくむ内容を講じていたと考えてよいだろう[28]。

結語

一連の考察をへて、ベルクソンが哲学的キャリアの初期において、「感性」という能力についてどのように考えていたのかを、我々は十全に理解することができた。

第一に、初期のベルクソンは、のちの『二源泉』におけるのと同様に、そして、ラランドの『哲学辞典』とも同様に、「感性」を「情緒性」によって規定する。しかし、第二に、初期のベルクソンは、『二源泉』および『哲学辞典』におけるのとおなじく、物理的刺激の結果として概念規定された「感覚」を、ただし、彼の最後の主著に反して、『哲学辞典』と同様に、「感性」のもとに包摂する。また、第三に、彼は、低次の、もしくは、「知性 - 以下の」と形容されよう「感情」を、『二源泉』ならびに『哲学辞典』と同様に、「感性」のもとに包摂する一方で、高次のと形容されるべき「感情」については、最後の主著におけるのとは異なり、『哲学辞典』とおなじく、考慮していない。そして、第四に、晩年のベルクソンならば、「感情」とならべて「感性」のもとに包摂し、しかも、とりわけ「感性」の高次の成分に言及するさいには多用することであろう、「情動」にいたっては、『哲学辞典』と同様に、初期においてはもとより考慮のそとにある。ようするに、初期のベルクソンは、「感性」を、その高次の成分への着眼を欠いたまま、「感覚」と同列に扱うのであって、したがって第五に、「感性」と意志との連携の問題や、

[28] ただし、さきにみたとおり、ベルクソンは『試論』で、「心理学講義」におけるのとは異なり、「感情」とならんで「情動」にも積極的に言及している。とはいえ、やはりさきにみたとおり、ベルクソンの処女作において、「情動」とは激しさを増した「感情」のことに他ならないのであるから、「情動」という用語によって、「感情」とは異なる情緒的状態が問われるわけではない。さらに言えば、彼は「情動」についても、「感情」と同様に、これを一定の観念に由来する心的状態とみなしているわけだから、のちの『二源泉』におけるように、「感性」の高次のと形容されるべき成分をとくに言いあてるべく、この用語が用いられているわけでは、もとよりない。

「感性」に属する心的事象の一性の問題などをめぐり、最後の主著に一脈通じる着想がかいま見られることがあっても、それはけっきょく、一と多の対概念をつうじてのちに表明されることになる、独自の思想へと結実することがない。

以上のことから分かるのは、晩年においては、同時代における標準とのあいだに確かな偏差を示すことになるであろう、「感性」をめぐるベルクソンの構想が、初期においては、そうした予兆をかすかに感じさせながらも、いまだ鳴りを潜めているということである。

凡例

ベルクソンの著作からの引用は*Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet（éd.）, P.U.F., 1991（1959[1re]）に拠り、以下の略号とともに、単行本、著作集の順に頁数を（　）内に記す。

D.I. : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 2007（1889[1re]）.

M.M. : *Matière et Mémoire*, 2008（1896[1re]）.

D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008（1932[1re]）.

講義録については、以下の略号を用いる。

C.I : *Cours I*, Henri Hude（éd.）, P.U.F., 1990.

C.II : *Cours II*, Henri Hude（éd.）, P.U.F., 1992.

C.P. : *Cours de Psychologie de 1892-1893*, Sylvain Matton（éd.）, Séha / Archè, 2008.